

審判員派遣報告書

| | | | |
|-------|--------------|------|----------------|
| 派遣事業名 | ウィンターカップ2021 | 派遣期日 | 令和3年12月23日～24日 |
| 報告者 | 仲地祥吾 | 派遣先 | 東京都 |

1 大会概要

| | | | |
|------|---------------------------------|------|----------------|
| 大会名称 | ウィンターカップ2021 | 大会期間 | 令和3年12月23日～29日 |
| 大会概要 | 県予選代表各1チームおよび特別枠参加チームによるトーナメント戦 | | |

2 担当試合 ※（試合内容は簡潔に書いてください）

| | | | |
|-------|---|----|-------|
| 日程 | 令和3年12月23日 | 会場 | 東京体育館 |
| 審判クルー | CC: 和嶋陽一（東京） U1: 仲地祥吾（香川） U2: 山本平（東京） | | |
| 担当試合 | 高岡第一高校 VS 洛南高校 | | |
| 試合内容 | 前半は高岡第一の3ポイントがよく決まり、均衡した試合展開であったが、落ち着いた試合運びで洛南がペースを握り、勝利した。 | | |

| | | | |
|-------|---|----|-------------|
| 日程 | 令和3年8月21日 | 会場 | とくぎんトモニアリーナ |
| 審判クルー | CC: 木下晋一（静岡） U1: 佐久間奈々（群馬） U2: 仲地祥吾（香川） | | |
| 担当試合 | 鳥取城北高校 VS 福岡大学付属若葉高校 | | |
| 試合内容 | 福岡大若葉がインサイドを起点に着実に得点を重ね、終始試合をリードした。 | | |

3 大会（研修会）を通して 《 学んだこと 感じたこと 県内審判に伝えたいこと 等 》

●3or2の確認とフラッシュについて

大会に参加しているどのチームにも、スリーポイントを得意とする選手が多く在籍しており、3or2を3人が協力して確認することが大切であると実感した。初日の試合では、どちらのチームもDHOやダウンスクリーンから始まるプレーを選択することが多く、トレイルの前がビジーになることが予想された。PGCではその時にリードとセンターがどのようにヘルプするかを確認し、試合に臨んだ。試合中にクルー間で3or2をアイコンタクトを取りながら確認できたことはよかった。

リードがいかに臨機応変に3or2のヘルプに参加するかが重要である。リードのプライマリエリアはフリースロラインよりも低い位置であるが、そこにビジーなものがなく、かつトレイルの目の前で多くのプレーが起きている場合は3or2のフラッシュをする準備が必要である。今回担当したチームはインサイドプレーに徹底する選手がおらず、アウトサイドプレーヤーを中心とするチームであった。（昨今はこのようなチームが多い。）ボールがアウトサイドにある時にペイントエリアがビジーになることは少なく、逆にトレイルの前でPNRやDHOなど、アングルを確保するのが難しいプレーが続いた。プライマリエリアに縛られすぎではなく、今コート上のクルーの誰が苦しく、どこにヘルプが求められているのかを臨機応変に考えて行動しなければいけないと感じた。

●リードのローテーションのタイミングについて

リードのローテーションのタイミングについて改善が必要だと感じた。ボールがパイプエリアから出たからと行って器械的にローテーションを開始するのではなく、一歩中に踏み込んで一呼吸置いてからローテーションを始めるように意識しなければいけない。

二日目の試合ではドライブが多い試合であった。リードのローテーションのタイミングとボールの動きが合わず、インパクトのある現象に対してプライマリが反応せずセカンダリが参加するケースが何回もあった。映像で検証すると、全てのケースにおいてリードのローテーションのタイミングが早すぎてバックペダルの選択肢をできない状況になっていた。ボールがパイプからウィークサイドに出た後に、一歩中に踏み込み一呼吸置いてからローテーションを始める意識がちょうど良いと学んだ。(←担当 IR からのアドバイス) 特に、特定のビッグマンがいないチームにおいてはドライブが多いので、このような意識は非常に効果的であると思う。今後の試合に生かしたい。

●イリーガルとマージナル

高校生のトップレベルになると、接触と責任がある場合でも RSBQ を崩さずにプレーを続けることができるケースが多くあるため、イリーガルとマージナルの見極めが重要であると感じた。今年度からアクトオブシューティングの記載が明確化されていることもあり、プレーの始まりで簡単にコールしてしまうとその後のショットをキャンセルしなければいけないケースがはっきりした。マージナルなものをファウルと判定することによって、取れるべき得点をキャンセルしてしまわなければいけないケースがあったので、もう少し慎重にプレーを見なければいけないと感じた。自分は見たことに対してすぐに笛を吹いてしまうことが多いので、慌てずにプレーの終わりまで見続けることを意識したい。

●自分のストロングポイントについて

現在、次年度の香川インターハイの担当を希望する研修生と話をする中で、「自分のストロングポイントは何か？」ということが話題にすることが多い。この点においては自分も主体的に考えるようにしている。自分の強みにできる点というのは意識しなければ作ることにはできない。というよりも、意識することにより、その点をストロングポイントに変えていくことができるのではないかと考えている。今回、インターハイに続いて全国大会を経験させてもらった。このような舞台に立った時に自分のストロングポイントは必ず心の支えになる。トラブルがあった時、目の前の現象に反応できなかったとき、緊張して頭が真っ白になった時も自分の強みさえあればきっと心を平静な状態に戻せるはずである。今後、県内の試合を担当する際にも常に自分の強みは何かを意識して取り組んでいきたい。

4 その他

インターハイに引き続き、コロナ禍にも関わらず、このような貴重な経験をさせていただきありがとうございました。今回学んだことを県内の審判員と共有し、今後の香川県の審判員全体の成長につながるよう努めてまいります。

派遣に際してご理解ご支援いただいた香川県バスケットボール協会の皆様、誠にありがとうございました。引き続きご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。